

Title	松山博士についての憶出
Author(s)	桑原, 隲藏
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88734">https://hdl.handle.net/11094/88734</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

たと云ふことは非常に力を落して居るのであります。松山君はなんでも一時は餘程禪に凝つて居つたです。それは廣島に居られる時に、宋學をやるのは宋儒が大概禪をやつて、それから又禪から出て六經孔孟の道をやつたのだからして、宋儒の學問をやるには禪をやらなくちやならん、と云ふことを能く言つて居られました。廣島に居つた時に國泰寺の和尚に就て禪をやつたらしい。けれどもあゝ云ふやうな人ですから何處迄やつたと云ふことも言はなかつたし、又聞きもしなかつたですが、其修養も亦た學問性格の上に少なからざる影響を有つて居たと思ひます、同君の遺事を想ひますと誠に感愴に堪へないもの計りであります。

(藤塚誠二筆記)

## 松山博士についての憶出

桑 原 隲 藏

松山君は私より一年許り後進ではあつたが、高等中學も同じく第三で、大學も同じく漢學科といふので、早くから知り合ひであつた。マア三十餘年來の知り合ひであるが、松山君といふと、何時も上下着けた様な儼然正座せる松山君の面影しか思ひ出せない。それ程松山君は一生を通じて、終始行儀な

眞面目の人であつた。

三十餘年の間に一番頻繁に往來したのは、同君が明治三十年に大學を卒業された頃から、明治卅六年か卅七年かに、廣島高等師範に赴任される頃までの約六年間であつたと思ふ。この時分同君はよく私の下宿に來訪して、一身又は一家の相談を掛けられた。私も時には江戸川畔の松山君の住居へ出掛け、當時同君は東京高等師範の附屬中學の教員や陸軍教授などを勤めて居られた。住居は御老母の外に、弟（この方は間もなく早世された）や妹の方を併せて、すべて五人暮しであつたかと思ふ。御老母は上品で誠に禮儀正しく、之に對する松山君の態度も鄭重至極で、元來素町人育で禮に嫻はざる私は松山君の住居ではイツモ多少窮屈を感じた程であつた。

明治卅年前後の漢學科の學生や出身者は、何れも酒豪揃であつた。淺川雄太郎君、白河鯉洋君、上田景二君などは大關格で、一升は平氣、之に續いて藤田劍峯君や山内晉卿君は關脇格であつた。従つて漢學科の宴會は、他の學科の宴會に比して、二倍の酒を用意するのが例であつた。所が松山君も私も一滴も飲めぬ生下戸で、イツモ同様に閉口した。併し私は酔拂ひと同様に、行儀が悪いから目立たぬが、松山君は杯盤狼籍の間に、例の儼然正座といふ態度で、頗る四周の雰氣に相應しない。丁度海上播遷の間に、治朝同様に、儼然として笏を正したといふ陸秀夫の觀があつた。

松山君は非常に綿密な性質で、日記なども漢文で克明に繼續された様である。同君がまだ東京に住

居された頃、東京現住の某君と協同で、或る種の編纂に従事されたことがあつた。その後約十年を経た頃、某君は當時の編纂物の原稿の所在が判明せぬのに當惑して、私に多分その原稿は松山君の手許に保管されて居るかと思ふが、直接に聞き合すのも氣の毒故、間接に私から一應アタツテくれとの依頼が來た。私はそれとなく松山君に聞き合すと、その原稿は夙に東京の某君の手許に郵送してある筈と思ふが、委細のことは後程とて、三四日を経ると、例の漢文の日記の中から、該事件に關係ある事項を抜萃して私方まで郵寄された。原稿の第一卷は何年何月何日、第二卷は何年何月何日と、一々某君の手許へ發送した時日を、明確に開列してある。私は更にそれを東京の某君へ轉寄して、君自身の手許を精査せよと申添へてやつた。果して松山君の申越しの通り、その原稿は某君自身の手許で發見されて、某君は大に面目を潰したことがある。

或る年の夏七月に、松山君が新調の白麻の夏服をつけて、私の下宿へ來訪された。その時分から肥満の同君は、生憎の炎天を徒歩して來たことゝて、流汗淋漓となり、馳走の氷水などを飲み、一時間許りを經て、歸り仕度に立上ると、敷いて居つた夏敷物が洋袴ズボンに喰着いて居る。ヤット離すと白い洋袴の尻一面に紅色の痕形がクツキリ着いて居る。これは私がその兩參日前に、勸工場で購入つた安物の夏敷物——紙か布かに着色して皮に模擬した——が松山君の體重と流汗とで剝げて、洋袴に着いたのである。意外の失策に私は非常に氣の毒な思をしたことがある。毎年夏敷物を出す頃になると、この

失策を思ひ出し、家内にも再三その談をしたが、今松山君についての憶出を綴ると、時節も丁度夏のことゝて、一番にこの出来事が胸に浮んで来る。

(八月二十日)

## 松山博士を追懐す

高 瀨 武 次 郎

松山博士が東京帝國大學文科大學の漢學科を卒業されたのは明治三十年七月であつた、私は其の翌三十一年の七月に卒業したのであるから、大學に在つては唯二箇年間共に學んだのみであつて、同教室に於て先師島田篁村先生の講義を聞いたことも大分あつたが、大學以前にも京都の第三高等中學校在學中にも同學校には居つたけれども、餘り親しくは知りませんでした。博士の漢學科の同年生は赤沼金藏、白川鯉洋、多城萬助、上田景二等の諸君であつて人數は少なかつた。私の入學した年には然にも十三名と云ふ多數の漢學專攻者がありまして島田先生も初對面の時に今年は大變多いと曰はれた程であつた、此時は遼東半島を取つた頃で漢學氣分が漲つた勢であらうと云ふ者もあつた、赤沼金藏中尉は話をすれば必らず遼東半島占領の功名談が出るので赤沼君を綽名して遼東半島と謂つて白川